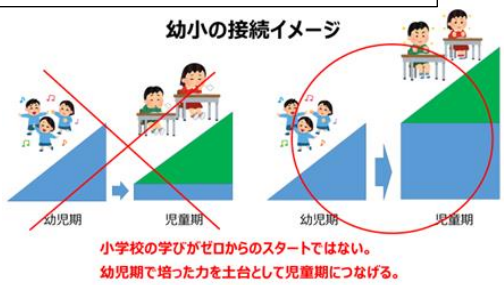
幼児教育と小学校教育との円滑な接続

背景　平成 29 年告示の幼児教育施設３要領・指針や小学校学習指導要領では、育成をめざす資質・能力を幼児教育から高等学校教育までを通じて系統的に示すとともに、「主体的・対話的で深い学び」を共通で示すなど、**学びの連続性の一層の確保**を求めています。
　また、小学校低学年においていじめの認知件数が多く、不登校児童の増加率も高い状況にあります※1。文部科学省報告※2によれば、幼児教育施設と小学校での学びや生活の段差による子どもの不安や戸惑いが背景の一つとして指摘され、**いじめ・不登校対策の観点**からも**「幼小接続期」の教育の充実に取り組むことが重要**です。



幼小の接続とは、幼児教育と小学校教育を接続させることです。
　子どもの育ちは連続しており、子どもの成長を切れ目なく支える観点から、子どもの立場に立ち、幼児教育で培った学びの上に小学校教育を展開していくことが重要であり、「小学校の学びがゼロからのスタートではなく、幼児期に培った力を土台として児童期につなげ、さらに力を伸ばしていく」といった意識が大切です。
　入学当初は、幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと育ちを踏まえて，児童が主体的に自己を発揮できるようにする場面を意図的につくることが求められます。**生活科は、幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続する重要な役割**を担っています。
　また、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる**５歳児から小学校１年生の２年間を「架け橋期」**とし、本県では幼児教育の土台に小学校教育をつなぐ取組を推進しています。

幼小接続を進める上で大切にしたいこと	
互いを理解する	互いの教育をよく知るために、保育者・教員が関わる機会を積極的に設けることが重要である。教育実践を見合う、合同研修を実施する等の場を通して互いの教育の理解を深める対話を重ねることが幼小接続の基盤となる。
架け橋期のカリキュラムを開発する	幼児教育施設や小学校の教育課程編成・指導計画作成（週案、月案等）の前提となる「架け橋期のカリキュラム」の開発を通して、架け橋期の教育が体系的かつ組織的に行えるようにする。幼児教育施設と小学校が熟議を経て協働で開発する必要がある。
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」※3を活用する	幼児教育施設及び小学校の各要領・指針には、幼小の教育を橋渡す視点「幼児期の終りまでに育ってほしい姿」が掲載されている。これは、子どもに資質・能力が育まれる過程で見られる生活の姿を総合的に示したものであり、その活用は円滑な幼小接続に資する。 （活用例）・小学校区の子どもの実態を幼小で話し合うときの視点とする。 ・保育改善、授業改善の視点とする。 ・幼小交流の計画や見直しの視点とする。

　島根県幼児教育センターでは、令和７年度、新たに「しまねの架け橋期の教育ガイド」を策定しました。幼児教育と小学校教育との接続の鍵となる架け橋期に焦点を当て、架け橋期のカリキュラムや生活科を中心としたカリキュラムデザイン等について分かりやすく解説しています。（冊子の配付や HP への掲載を予定しています。）

島根県幼児教育センター　検索

島根県幼児教育センターHP へはこちらから！

※1:文部科学省「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」(R5.10)

※2:文部科学省「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会 最終報告」(R6.10)

※3:到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある。詳細は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小学校学習指導要領を参照のこと